村杉恵子編、『言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約―日本語獲得に基づく実証的研究：成果報告書 II』、pp.1-30、2013 年 9 月、国立国語研究所／南山大学.

日本語文法を特徴付けるパラメター再考*

斎藤　衛

1. 序

Chomsky (1981) における原理とパラメター理論の提案以降、日本語文法を特徴付けるパラメターに関する様々な仮説が示されてきた。Hale (1980) の階層性パラメターは、日本語を非階層言語とすることにより、以下の特徴に説明を与えることを試みたものである。

(1) a.　自由語順
　　b.　空項の広範な分布
　　c.　複合動詞の多用

また、Kuroda (1988) は、日本語においては「一致」が随意的であるとし、その帰結として、(2) に示す現象を導く。

(2) a.　スクランブリング
　　b.　多重主格主語文
　　c.　義務的な wh 移動の欠如

本論は、1990 年代以降の極小主義アプローチに基づく研究の成果をふまえ、Kuroda (1988) の理論を発展させることを目的とする。具体的には、φ素性一致の欠如を日本語の基礎的な性質として、文法格の役割と与値メカニズムを捉え直し、項省略現象、多重主語現象、スクランブリング、語彙的複合動詞の多用に説明を与えることを試みる。

φ素性一致の欠如に基づいて日韓語の特徴に分析を加える試みは、Saito (1982)、Yang (1983) や Fukui (1986) に見られるように、1980 年代前半から追究されてきたが、より最近の提案としては、Saito (2007)、Şener and Takahashi (2010) による項省略現象の分析がある。第２節では、まず、この分析を概観し、日韓語が φ素性一致を欠くとする仮説の有効性を確認する。次に、この結論をふまえ、日本語における文法格の与値メカニズムを検討する。Chomsky (2000) は、文法格が φ素性一致を通して与値されることを提案するが、この分析は φ素性一致を欠く言語には適用しえない。本論では、格の与値が φ素性一致とは独立した形でなされるとする Bošković (2007) の分析を採用し、その帰結として多重主格主語文の存在が導かれることを示す。

日本語が φ 素性一致を欠くとする仮説の下では、文法格の存在意義も再検討する必要が生じる。Chomsky (2000) では、文法格が φ 素性一致を可能にする役割を担うとされているからである。本論の第３節では、Chomsky (2013) の構成素ラベリングに関する議論を概観し、日本語文法格がラベリングにおいて不可欠な役割を果たすことを提案する。具体的には、併合により形成された (3) の構成素において、文法格が αP を不可視的にする機能を有し、結果として、構成素が βP のラベルを継承することを可能にする。

(3)　{αP [文法格], βP}

その上で、述語の連体形、連用形、終止形等の屈折が、ラベリングにおいて、文法格と同様の役割を担うことを示唆する。この仮説は、日韓語における述語の屈折と文法格を類似するものとして分析する Sells (1995)、An (2009) の洞察をふまえて、両者に統一的な統語分析を与えるものであり、帰結として、日本語においてスクランブリングが可能であることを導く。

第４節では、述語屈折がラベリング補助の機能を担うとする分析に基づき、影山 (1993) が詳細に例証する日本語の語彙的複合動詞の性質に説明を与えることを試みる。語彙的複合動詞の分析としては、(4) に示すように、二動詞を直接併合することにより生成され、動詞の連用屈折がこれを可能にしているとの提案を行う。

(4)　{V [屈折], V}

第５節の目的は、日本語における φ 素性一致の欠如と主要部後置型語順の関連を探ることにある。まず、外池 (2009) が提案する句構造派生のメカニズムを採用することにより、Kayne (1994) の線上的先行関係の構造対応公理 (Linear Correspondence Axiom) から日本語の主要部後置型語順を導こうとする Saito (2012) の議論を概観する。その上で、当該の句構造派生メカニズムが、φ 素性一致の欠如によって可能となることを示す。

2. 日本語における φ 素性一致の欠如と文法格与値のメカニズム

日本語では、φ 素性一致の現象が顕在的な形で観察されないが、このことから、φ 素性一致が存在しないことを直接結論として導くことはできない。φ 素性一致が抽象的な形で存在する可能性を否定しえないからである。本節では、まず、Saito (2007) および Şener and Takahashi (2010) が提案する項省略現象の分析を概観し、日本語が φ 素性一致を欠くとする仮説の有効性を見る。次に、この結論をふまえて、文法格の与値を φ 素性一致とは独立したプロセスとして捉える Bošković (2007) の分析を日本語に適用し、その帰結を探る。

日韓語における項省略現象は、Oku (1998) および Kim (1999) によって指摘されたもので

ある。両言語における空項の広範な分布は広く知られているが、Kuroda (1965a) 以来、これは、*pro* が項の位置に自由に生起することによるとされてきた。しかし、Otani and Whitman (1991) が、(5b) に例示するように、空目的語がスロッピー解釈を許容することを考察し、*pro* 仮説が不充分であることが示された。

(5) a. 太郎は、いつも自分の博士論文を引用する。
b. でも、花子は、全然 [*e*] 引用しない。
i. [*e*] = 太郎の博士論文 (ストリクト解釈)
ii. [*e*] = 花子の博士論文 (スロッピー解釈)
c. でも、花子は、全然それを引用しない。
i. [*e*] = 太郎の博士論文 (ストリクト解釈) のみ

(5c) が示すように、代名詞はスロッピー解釈を許容しない。従って、(5b) の空目的語が *pro* であるとする分析は、スロッピー解釈を予測することができない。他方、スロッピー解釈は、(6) の VP 省略の例に見られるように、省略 (削除) に伴う現象であることが知られている。

(6) a. John loves his mother.
b. Bill does [*e*], too.
i. [*e*] = love John's mother (ストリクト解釈)
ii. [*e*] = love Bill's mother (スロッピー解釈)

Otani and Whitman (1991) は、この事実をふまえ、VP 省略による (6b) の派生を提案する。この分析によれば、(6b) は、動詞が T に移動し、結果として目的語のみを含む VP を省略することにより派生される。

しかし、Oku (1998)、Kim (1999) は、VP 省略によっては説明しえない例をあげ、Otani and Whitman (1991) の分析に疑問を投げかける。例えば、Oku (1998) は、主語の位置に生起する空項もスロッピー解釈を許容することを指摘する。(7b) が一例である。

(7) a. 花子は、[$_{CP}$ [$_{TP}$ [自分の提案]が採用される] と] 思っている。
b. でも、太郎は、[$_{CP}$ [$_{TP}$ [*e*] 採用される] と] 思っていない。
i. [*e*] = 花子の提案 (ストリクト解釈)
ii. [*e*] = 太郎の提案 (スロッピー解釈)

この種の例に基づき、Oku (1998) と Kim (1999) はそれぞれ日本語と韓国語において、主語、目的語等の項自体が省略される現象があるとの結論を導く。

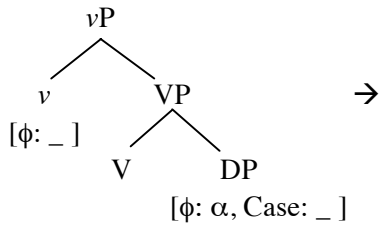
Oku と Kim の結論が正しければ、なぜ、日韓語において項省略が可能であるのかが追究さ

れなければならない。(8) が示すように、例えば英語では、項の省略は文法的に許容されない。

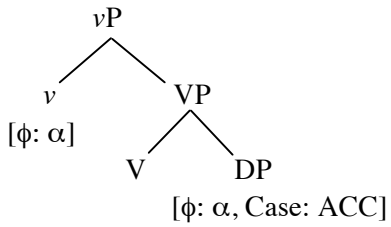
(8) a. John always cites his dissertation.
b. *But Bill doesn't cite [*e*] at all.

この問題は Oku (1998) においてすでに論じられているが、Saito (2007) は、φ素性一致の欠如が、項省略を可能にすることを提案する。この提案は、項省略が LF コピーにより解釈されるとする Oku (1998)、篠原 (2006) の結論に加え、Chomsky (2000, 2008) が提示する φ素性一致のメカニズムに基づく。後者は、値を欠く φ素性を伴う機能範疇主要部が、DP を探索し、「一致」の関係を結ぶとするものである。*v* の場合を (9) に例示する。[1]

(9) a.



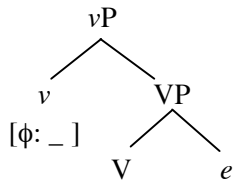
→ b.



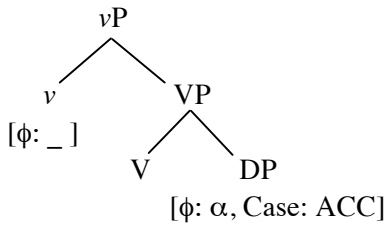
v は φ 素性の値を必要とするため、領域 (c-統御領域) 内を探索し、φ 素性を有する DP と「一致」の関係に入る。この一致により DP の φ 素性が *v* にコピーされ、またその反映として、DP の格に ACC の値が与えられる。ここで重要となるのが、一致の関係が成立するための必要条件として課される活性条件 (activation condition) である。この条件は、一致の関係を結ぶ双方の要素が値を必要とする素性を有しなければならないとし、特に、格の与値を必要とする DP のみが機能範疇に φ素性の値を供給しうる事実を説明する。(9) においては、*v* が φ素性の値、DP が格の値を必要とするが故に、*v* と DP の間に一致が成立し、*v* の φ 素性が与値されることになる。

機能範疇の φ素性が、(9) に例示したメカニズムにより与値されるとすれば、項省略は文法的に許容されない。目的語省略を例にとって考えてみよう。

(10) a.



→ b.



(10a) では、目的語が省略され、空となっている。LFコピー分析によれば、この構造は、(10b) に示すように、先行する文脈から DP を空目的語の位置にコピーすることにより解釈される。しかし、コピーされる DP は、先行文脈ですでに格を与値されていることから、活性条件を

満たさず、*v* にとって一致の対象とはなりえない。[2] 結果として、*v* の φ素性が与値されず、この派生は破綻することになる。このように、Chomsky (2000, 2008) が提示する φ 素性一致のメカニズムは、英語では項省略が許容されないことを正しく予測する。

では、なぜ、日韓語においては、項省略が可能なのだろうか。言い換えるならば、なぜ、日韓語では、(10b) に示した LF コピーが派生の破綻を引き起こさないのだろうか。日韓語が φ素性一致を欠く言語であれば、この問いに明確な答えが与えられる。φ素性一致とは、T および *v* が φ素性を有し、T は主語、*v* は目的語から φ素性の値を与えられる現象である。従って、φ素性一致の欠如は、T と *v* が φ素性を有しないことを意味する。再び (10) を例にとって、日韓語の場合を考えてみよう。(10b) において、活性条件により、*v* と DP の間に φ素性一致の関係は成立しえない。しかし、*v* に与値されるべき φ素性が存在しないのであれば、このことにより何の問題も生じないし、そもそも、*v* は φ素性の値を提供する DP を探索しない。よって、日韓語では、LFコピーによる空項の解釈が可能であり、項省略が許容されることが正しく予測される。

項省略現象が、日本語が φ素性の一致を欠くとする仮説を裏付ける証拠となることを見てきたが、この仮説の下では、日本語における文法格の存在意義と格与値のメカニズムを再考する必要が生じる。(9) に見たように、Chomsky (2000, 2008) の理論では、文法格は φ素性一致を成立させるために存在し (活性条件)、φ素性一致を通して与値される。従って、この理論を前提とする Ura (1999)、Hiraiwa (2001)、Takahashi (2010) 等における日本語文法格の分析では、日本語においても φ素性一致が抽象的には存在することが仮定されている。しかし、日本語の特徴を φ素性一致の欠如に求める限り、Chomsky (2000, 2008) の文法格の分析をそのまま日本語に適用することはできない。以下、本節の後半では、日本語文法格の与値メカニズムについて、Bošković (2007) の分析に基づく代案を提示し、日本語における文法格の存在意義については、次節で取り上げることとする。

まず、日本語文法格の与値が、φ素性一致によらないことを示す独立した根拠があることを指摘したい。日本語では、DP のみならず、PP が文法格を伴うコンテクストが広範に観察される。(11) の PP 主語は、その一例である。

(11) a. ここからが、富士山に登りやすい。
b. ５時までが、運賃が安い。

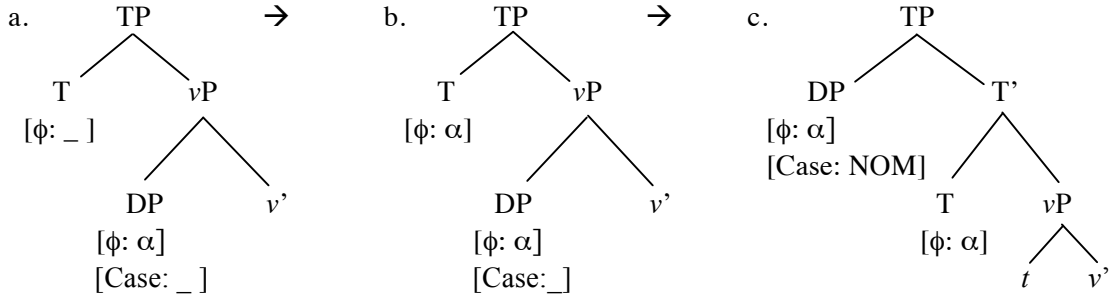
また、名詞の投射内では、PP は、項であるか修飾句であるかに拘らず、属格を伴わなければならない。

(12) a. [太郎の [友達との [ヨーロッパへの旅行]]]
b. [花子の [無一文での [東京からの出発]]]

DP と異なり、PP は少なくとも意味解釈が与えられうる φ 素性を有しない。従って、PP に付随する主格や属格が φ 素性一致を通して与値されるとは考えにくい。

では、文法格は、φ 素性一致と独立した形でどのように与値されうるのだろうか。統語理論において、文法格与値を φ 素性一致から切り離す提案は、すでに Bošković (2007) においてなされている。Bošković は、素性の与値が、常に、値を必要とする要素が探索子となり、値を供給する要素を探索することによりなされると主張する。この提案によれば、主語と時制の φ 素性一致、主語の主格与値は、(13) に示すプロセスによる。

(13)



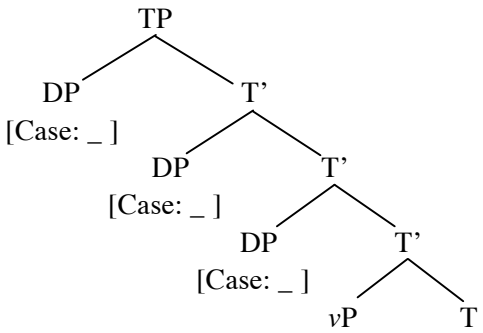
(13a-b) に示すように、φ 素性の値を必要とする T が領域内を探索して、*v*P 内主語の DP と一致し、その φ 素性を得る。しかし、この段階では、DP は探索子ではないため、格を与値されない。DP は、探索子として、T を見出すことにより主格を与値されるが、そのためには、T を領域内に含む位置に移動しなければならない。Bošković は、この理由により、主語が TP 指定部に移動するとする。(13c) が示すように、主語 DP の移動 (内的併合) により、DP が T を探索し、その格素性が主格を得る構造が形成される。[3]

Bošković (2007) の分析では、格素性の値を必要とする要素が、φ 素性一致を介在せず、直接、格の値を供給する主要部を探索し、T を見出せば主格、*v* を見出せば目的格を与値される。この分析は、φ 素性一致を欠く言語にも適用することができ、PP の格の与値も問題とならない。(11)-(12) に見た、格を伴う PP の広範な分布は、この分析を支持する証拠となる。さらに、この分析は、日本語の特徴である多重属格現象、多重主格現象を正しく予測する。(12) が示すように、日本語では、同一名詞句内で、属格 NP/PP が複数生起する。主格についても、Kuno (1973) 以来、多重主語文の存在は広く知られている。(14) は、Kuno (1973) の有名な例である。

(14) [$_{TP}$ 文明国が [$_{TP}$ 男性が [$_{TP}$ 平均寿命が短い]]]

(15) に示すように、(14) は三つの DP がそれぞれ、格素性の与値者として T を見出す例として分析することができる。

(15)



従って、多重主格文の存在は、Bošković (2007) の分析の直接的な帰結として導かれる。もし、主格の与値が T の φ 素性一致の反映としてなされるのであれば、(14) のような多重主格は予測されない。T の φ 素性を与値する DP は一つであり、φ 素性一致は 1 対 1 の関係と考えられるからである。[4]

3. ラベリングを可能にする文法格の役割

前節において指摘したように、日本語が φ 素性一致を欠くとする仮説の下では、日本語の文法格の統語的役割を検討する必要が生じる。Chomsky (2000, 2008) は、活性条件により、文法格を φ 素性一致を可能にするものと位置付ける。しかし、日本語に φ 素性一致がないのであれば、文法格の意義は他に求められなければならない。本節では、Chomsky (2013) における構成素のラベリングに関する議論を概観し、その上で、日本語の文法格がラベリングにおいて重要な役割を担うとの提案を行う。さらに、Sells (1995)、An (2009) の洞察に基づいて、述語の屈折にも同様の機能があることを主張し、日本語の句構造形成におけるラベリングについてより一般的に議論する。

Chomsky (1994) の裸句構造理論では、言語を言語足らしめるために最低限必要な操作として、任意の二要素を含む構成素を形成する「併合」が仮定される。例えば、(16) に示すように、併合により、α と β を含む構成素 γ が形成される。

(16) $\gamma = \{\alpha, \beta\}$

ここで、統語論が供給しなければならない情報として、形成された構成素 γ の性質がある。具体例としては、α が動詞、β が目的語として解釈される DP であれば、γ は 動詞句として α の性質を受け継ぐことなどが挙げられるが、より一般的に併合により形成される構成素の性質を決定するメカニズムが求められる。これが、Chomsky (2013) が取り上げる構成素のラベリングの問題である。

Chomsky (2013) は、まず、以下の三つのケースを考慮する。

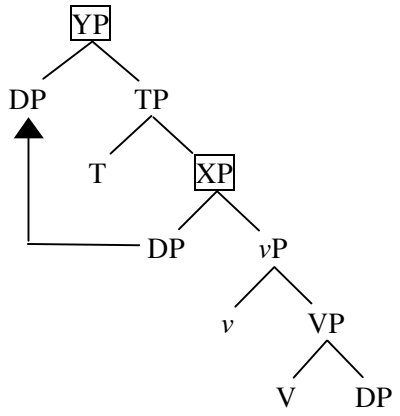
(17) a. $\gamma = \{H, \beta P\}$

b. $\gamma = \{\alpha P, \beta P\}$

c. $\gamma = \{H, H\}$

(17a) は、主要部と句 (非主要部) が併合する場合で、γ は主要部のラベルを受け継ぐと考えられる。問題となるのは、二つの要素が識別できない場合であり、句と句が併合する (17b) および主要部と主要部が併合する (17c) がこれに相当する。Chomsky (2013) は、(17b) の具体例を考察しつつ、二つの提案を行う。(18) に示す TP の構造を例にとって、Chomsky の提案を見ていくことにしよう。

(18)



この構造を下層から順次形成していった場合、外項の DP を *v*P に併合した時点で、最初に (17b) のパターンが生じる。このケースについて、Chomsky (2013) は、DP が TP 指定部に移動する (コピーされる) ことを考慮し、構成素は、そのすべてのコピーを含む要素からのみラベルを受け継ぐことができるとする。この提案により、XP のラベルが *v* であることが正しく予測される。

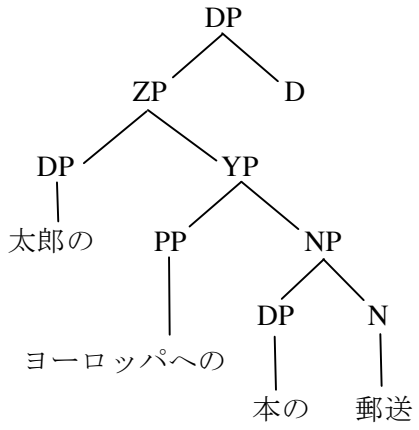
次に (17b) のパターンが生じるのは、外項の DP が移動により TP に併合する時点である。この場合には、DP と TP (あるいはそのラベルである T) が φ 素性一致により、φ 素性の値を共有している。そこで、Chomsky (2013) は、この素性の共有により YP のラベルが決定されることを提案する。素性の共有によるラベリングは、演算子の CP 指定部への移動にも適用される。例えば、wh 句が疑問文 CP の指定部に併合した場合、wh 句と C は疑問の素性 Q を共有しており、この素性の共有が形成される構成素のラベリングを可能にする。

Chomsky (2013) が提案するラベリングのメカニズムは、φ 素性一致の統語的役割を示すものである。(18) における YP のラベリングは、φ 素性一致により可能になることから、φ 素性一致はラベリングにおいて不可欠な役割を果たす。一方で、日本語のような言語におけるラベリングについては、様々な問題が生じる。まず、日本語が φ 素性一致を欠くとすれば、主語の TP 指定部 への併合によって形成される構成素のラベリングがどのようになされる

かが定かではない。また、複数の DP が TP に併合する多重主格主語文や以下のような名詞句も問題となる。

(19) a. [太郎の [ヨーロッパへの [本の郵送]]]

b.



この例の派生は、三つの項の併合を伴う。その中で、ラベリングの問題を誘発するのは、PP の NP への併合、さらに主語 DP の併合である。明らかに素性の共有はなく、形成される構成素のラベルを決定することができない。[5]

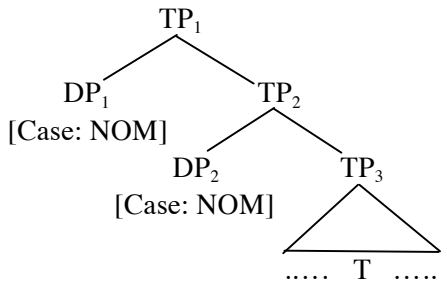
上に述べたラベリングの問題に対する解決案として、日本語の文法格がラベリングに寄与する可能性を追究したい。まず、明確な一般化として、格を伴う句は常に最大投射であり、さらに投射することはないということがある。そこで、文法格の機能として、ラベリングにおいて句を不可視的にすることが考えられる。この仮説に従えば、(20) では、αP は不可視的であり、結果として γ は βP のラベルを受け継ぐことになる。

(20) $\gamma = \{\alpha P\ [Case], \beta P\}$

主格主語と TP の併合によって形成される構成素は、TP のラベルを引き継ぐ。また、(19b) においては、すべての項が属格を伴うことから、YP と ZP のラベルは N となる。

日本語の文法格がラベリングにおいて句を不可視的にするとする仮説により、二つの帰結が導かれる。第一に、前節で提示した多重主格主語の分析が完結したものとなる。前節では、Bošković (2007) の分析の帰結として、(21) に示すように、複数の主語が T により主格を与値されることを指摘した。

(21)



しかし、この分析は、すべての言語に適用されるものであり、多重主語が日本語では許容され、例えば英語では許容されないという言語間の相違には、まだ説明が与えられていない。英語については、Chomsky (2013) のラベリングに関する仮説によって説明が可能となる。通常の主語 DP_2 は、T と φ 素性を共有しており、結果として TP_2 のラベリングは問題なくなされる。しかし、DP_1 には T との φ 素性の共有がないため、TP_1 のラベルを決定することができない。よって、英語における多重主語は、ラベリングのメカニズムにより排除される。他方、日本語では、文法格が {αP, βP} のラベリングに寄与する。DP_2 が格を有するため、TP_2 は TP_3 のラベルを受け継ぎ、DP_1 の格が TP_1 のラベリングを可能にする。従って、多重主語に関する言語間の相違は、文法格の与値メカニズムではなく、ラベリングのメカニズムによって説明される。

第二に、日本語において、DP のスクランブリングが可能であることが予測される。日本語のスクランブリングについては、様々な分析が提案されているが、明確な性質の一つとして、演算子移動でも A 移動でもないということがある。[6] この性質は、以下の例に見ることができる。

(22) a. みんなが [$_{CP}$ 花子がどの本を選んだか] 知りたがっていること
b. どの本を$_i$ みんなが [$_{CP}$ 花子が t_i 選んだか] 知りたがっていること

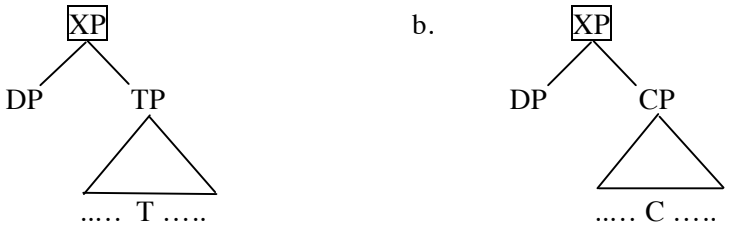
(22a) は、wh 句「どの本を」が疑問文に含まれる通常の例である。(22b) では、wh 句がスクランブリングによって、補部の疑問文から取り出され、主文の文頭に移動している。この移動に拘らず、(22b) は文法的に適格であり、(22a) と同様の解釈を受ける。(22b) に観察されるスクランブリングは、A 移動の局所性を満たさず、A 移動ではありえない。また、演算子移動であれば、「どの本を」が着点において演算子として解釈されなければならないが、この wh 句は、補部疑問文の一部として解釈される。従って、スクランブリングは演算子移動でもない。このような非演算子、非 A 移動は、なぜ日本語において許容され、例えば英語では観察されないのだろうか。

まず、英語の場合について考えてみよう。議論の前提として、(23) に A 移動と wh 移動によって形成される構造を示す。

(23) a. A 移動　　b. wh 移動

(23a) では ϕ 素性の共有、(23b) では Q 素性の共有により、XP のラベリングが可能になる。これに対して、非 A 移動、非演算子移動であるスクランブリングの場合は、ϕ 素性や演算子素性の共有はない。(24a) がスクランブリングによって移動する DP が TP と併合する場合、(24b) が CP と併合する場合の構造である。

(24) a.　　b.



結果として、英語においては、XP のラベルを決定することができず、スクランブリングが許容されないことが予測される。他方、日本語文法格の機能に関する仮説の下では、日本語においては、(24) の構造でラベリングの問題は生じない。スクランブリングによって併合された DP が文法格を有し、ラベリングにおいて不可視的であることから、XP は、(24a) では TP、(24b) では CP のラベルを受け継ぐ。よって、日本語においてのみ DP のスクランブリングが可能であることが正しく予測される。

日本語において、スクランブリングの対象となるのは、DP だけではない。(25) に示すように、PP や副詞句もスクランブリングによって前置される。

(25) a. ロンドンから$_i$ 花子が t_i 戻った
　　b. 静かに$_i$ 太郎が t_i 帰った

PP は、(12) に見たように、名詞の投射内では属格を伴う。(12) を (26) に再掲する。

(26) a. [太郎の [友達との [ヨーロッパへの旅行]]]
　　b. [花子の [無一文での [東京からの出発]]]

そこで、(25a) のように PP が文内に生起する場合にも、音声的に空の格を伴うものと仮定す

ることができる。副詞句については、どのように考えることができるだろうか。この問題に答えるために、日韓語の文法格と述語屈折を類似するものとして捉える Sells (1995)、An (2009) のアプローチを発展させつつ、日本語におけるラベリングについてより一般的に考察することにする。

日本語文法格の機能を、ラベリングにおいて句を不可視的にすることに求める仮説は、日本語文法格が英語等の文法格とは根本的に異なることを含意し、その点で、韓国語の属格を連体形の一種とみなす An (2009) の分析と共通性を有する。日韓語では、述語が、その投射が併合する要素により、異なる屈折を示す。現代日本語では、表層的な屈折形の区別が部分的に失われているが、形容動詞句 (AVP) の場合には、例えば以下のパターンが観察される。

(27) a. この部屋は、[とても静かだ] (終止形)
b. [とても静かな] ホテルの部屋 (連体形)
c. 太郎は [とても静かに] 部屋を出た (連用形)

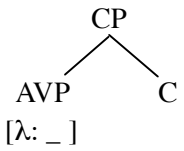
An (2009) は、DP や PP も同様の屈折を示すとし、属格を DP と PP の連体形を形成する要素として分析する。ここで、格を伴う DP や PP と同様に、屈折述語を主要部とする句も、屈折の形を決定する要素と併合する際に、決して投射しないことに注目されたい。例えば、(27b) では、AVP「とても静かな」と NP「ホテルの部屋」が併合するが、形成される構成素は、NP のラベルを受け継ぐ。従って、述語の屈折も、文法格と同様に、ラベリングにおいて句を不可視的にする機能をもつと考えることができる。この仮説は、文法格と述語屈折の共通性に実体を与えることにもなる。例えば、ラベリングにおいて句を不可視的にする「反ラベリング素性」λ が存在し、λ は DP や PP においては文法格、述部においては屈折として与値されるとすることができるのである。

ここで、素性 λ に関するより具体的な与値メカニズムを考えてみよう。まず、いかなる要素も λ をもつことができると仮定する。[7] 句と句を併合する場合には、(28) に示す三つの可能性がある。

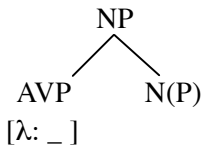
(28) a. $\gamma = \{\alpha P\ [\lambda], \beta P\ [\lambda]\}$
b. $\gamma = \{\alpha P\ [\lambda], \beta P\}$
c. $\gamma = \{\alpha P, \beta P\}$

(28a) では、γ は αP、βP のいずれのラベルも受け継ぐことができず、ラベルをもつことができない。(28c) においても、素性の共有がなければ、γ のラベルを決定することができない。(28b) の場合のみ、γ は βP のラベルを受け継ぐことができる。以上の仮定の下に、(29) に示す形容動詞句の λ の与値を見てみよう。

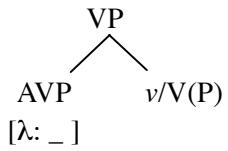
(29) a.



b.

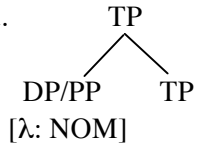


c.

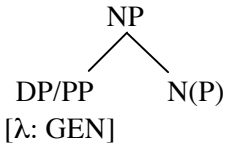


形容動詞の屈折は、形容動詞句が C と併合した時に終止形、N あるいは N の投射と併合した時に連体形、*v*/V あるいはその投射と併合した時に連用形となる。従って、λ は C によって終止 (conclusive)、N によって連体 (prenominal)、*v*/V によって連用 (preverbal) の値を与えられるものとすることができる。λ が DP あるいは PP に付随する場合には、類似する形で、以下のように、主格が T、属格が N、対格が *v*/V により与値されるものとする。[8]

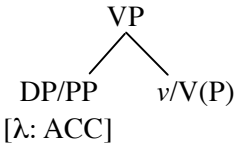
(30) a.



b.



c.



以上に概観した文法格と述語屈折の統一的な分析により、日本語スクランブリングの説明が完結する。問題として残されていた (25b) を (31) に再掲する。

(31)　静かに$_i$ 太郎が t_i 帰った

この例では、スクランブリングにより、AVP「静かに」が TP と併合する。形成される構成素のラベリングが問題となりうるが、AVP は連用 (preverbal) として与値された λ 素性を有しており、ラベリングにおいて不可視的である。結果として、スクランブリングにより形成された構成素は、TP のラベルを受け継ぐことになる。

本節では、λ 素性により、日本語では、{αP, βP} の構造が比較的自由に形成されうることを提案した。次節では、λ 素性が {H, H} を可能にする場合があることを示唆する。具体的には、影山 (1993) において詳細に検討されている日本語の語彙的複合動詞を取り上げ、述語屈折の λ 素性としての分析により、その特異な性質が説明されることを示す。

4. 語彙的複合動詞に見られる他動性調和現象

影山 (1993) は、日本語における複合動詞を、統語的複合動詞、語彙的複合動詞、語彙概念構造の操作を伴う複合動詞の三種に分類した上で、語彙的複合動詞が、以下の他動性調和の原則に従うことを論証する。

(32)　語彙的複合動詞 V_1+V_2 において、V_1 と V_2 は外項の有無に齟齬があってはならない。

この一般化は、V_1 と V_2 の一方が非対格動詞であれば、もう一方も非対格動詞でなければならないというものである。一例として、(33a) と (33b) の対比を示す。

(33) a. 花子が太郎を押し倒した
b. *太郎が鯨を浮かび見た

(33a) では複合動詞が二つの他動詞によって構成されているのに対して、(33b) の複合動詞は非対格動詞と他動詞の組み合わせとなっている。(34) に他動性調和の原則に従う複合動詞、(35) にこの原則と矛盾する不適格な複合動詞を挙げる。

(34) a. 他動詞＋他動詞：引き抜く、握りつぶす、叩き落とす、刈り取る、受け止める
b. 非能格＋非能格：走り寄る、飛び降りる、駆け上る、歩き回る、群れ飛ぶ
c. 非対格＋非対格：滑り落ちる、浮かび上がる、生まれ変わる、降り注ぐ
d. 他動詞＋非能格：持ち歩く、探しまわる、待ち構える
e. 非能格＋他動詞：泣き腫らす、乗り換える、飲み潰す、踊り明かす

(35) a. 非対格＋他動詞：*浮かび見る、*落ち隠す
b. 他動詞＋非対格：*押し倒れる、*飲み酔う
c. 非能格＋非対格：*遊び落ちる、*走り転ぶ
d. 非対格＋非能格：*落ち降りる、*流れ泳ぐ

(32) に示した一般化は、興味深い理論的問題を提示する。影山は、(32) が普遍的に観察されるものではなく、日本語に固有の制約であるとする。Huang (1992) から引用した (36) の例は、(32) が中国語の複合動詞には適用されないことを示す。

(36) a. Ta he-zui (jiu) le
he drink-get.drunk wine Asp.
'He drank (wine) and got drunk'

b. Ta qi-lei-le lianpi ma
he ride-tired-Asp. two horse
'He rode two horses and got them tired'

同時に、日本語を母語とする幼児が、経験を通して (32) を獲得するとは考えにくい。(32) の獲得は、間接否定情報を必要とすると考えられる。生得的原理でも、経験を通して獲得されるものでもないとすれば、(32) は日本語の語彙的複合動詞の性質から導かれる帰結であると考えるのが妥当であろう。本節では、当該の性質が、複合動詞が二つの動詞の併合により統語的に形成されることであるとの提案を行う。さらに、このような派生が、V_1 が λ 素性を有

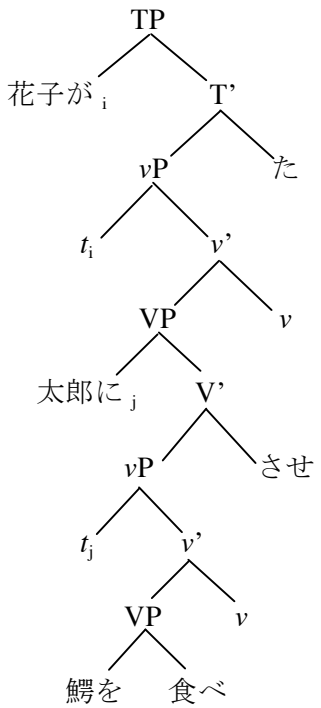
することにより可能となることを示す。

語彙的複合動詞の分析に入る前に、影山 (1993) の日本語複合動詞の分類について簡単に見ておこう。(37) は、統語的複合動詞の例である。

(37) a. 花子が太郎に鰐を食べさせた
b. 太郎が鰐を食べ始めた

(37a)、(37b) は *tabe-sase-ta*、*tabe-hazime-ta* という複合動詞を述部とするが、複合動詞を構成するそれぞれの動詞が項構造を有し、VP を投射する。[9] (38) が Murasugi and Hashimoto (2004) が提示する (37a) の構造である。

(38)



影山 (1993) は、統語的複合動詞において V_1 が独自の VP を投射する証拠として、VP (あるいは V') の代用表現である「そうす」(*soo su*) の分布を挙げる。(39) に示すように、(37) の例においては、「そうす」を V_1 が投射する VP に代用することができる。

(39) a. 花子が太郎にそうさせた
b. 太郎がそうし始めた

これに対して、語彙的複合動詞の場合には、以下の例が示すように、「そうす」を同様の形で用いることができない。

(40) a.　花子が太郎を押し倒した
　　b. *花子が (太郎を) そうし倒した

(41) a.　太郎が滑り落ちた
　　b. *太郎がそうし落ちた

(40b)、(41b) の非文法性は、語彙的複合動詞においては、V_1 が独自の VP を投射せず、V_1+V_2 が単独の動詞として VP を投射することを示唆する。この考察に基づき、影山 (1993) は、語彙的複合動詞は語彙部門で形成され、統語的派生においては、単独の動詞としてふるまうとする。

影山 (1993) が第三種の複合動詞として挙げるのが、語彙概念構造の操作を伴う複合動詞である。(40)、(41) の語彙的複合動詞の場合には、V_1 と V_2 がそれぞれ項構造を有し、独立した動詞として表れうる。他方、(42) の「込む」(*kom*) は、接尾動詞であり、単独では生起しない。

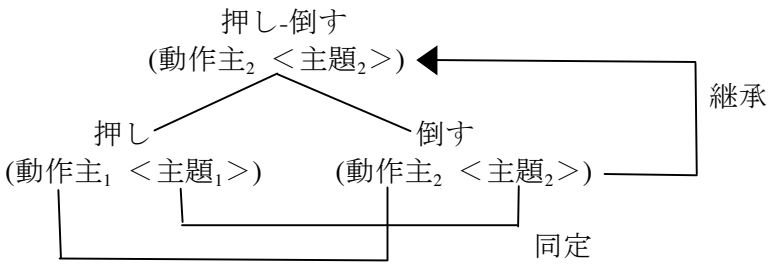
(42) a.　花子が太郎を部屋に追い込んだ
　　b.　太郎が川に飛び込んだ
　　c.　汚染水が海に流れ込んだ

(42) の例から明らかなように、「込む」は、V_1 の意味構造に情報を追加する。(42a-c) は、それぞれ、「追った」、「飛んだ」、「流れた」という動詞のみであっても、人あるいは物が移動する事象を表す。「込む」を接尾動詞として V_1 に付随させることにより、当該の人あるいは物が特定の場所に移動するという情報が加えられる。(42a) では「太郎が部屋に」、(42b) では「太郎が川に」、そして (42c) では「汚染水が海に」移動する。影山 (1993) は、「込む」の機能を、接続する動詞の語彙概念構造に情報を追加することにあるとする。

影山 (1993) は、以上の複合動詞の分類をふまえて、語彙的複合動詞の具体的な分析を提示する。語彙的複合動詞は語彙部門で形成されるが、同時に V_1 と V_2 が独自の項構造を有する。この二つの性質に基づき、影山は、V_1 と V_2 の項の同定により、V_1+V_2 の項構造を導く分析を提案する。(43) に再掲する (40a) を例にとって、影山の分析を (44) に図示する。

(43)　花子が太郎を押し倒した

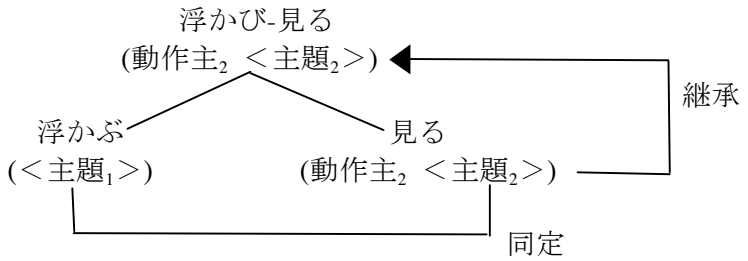
(44)



(44) に示されているように、「押す」(*os*) と「倒す」(*taos*) の動作主および主題が同定され、その上で、「押し倒す」は「倒す」の項構造を継承する。

(44) で興味深いことは、V_1 と V_2 の動作主同士、主題同士が同定されていることである。結果として、(43) において、「花子」は「押す」と「倒す」双方の動作主となり、「太郎」は双方の動詞の主題として解釈される。しかし、項の同定という操作を採用する限り、このような解釈を得る必然性はない。例えば、動作主$_1$と主題$_2$、主題$_1$と動作主$_2$を同定することも原理的には可能な筈である。また、(44) に示した語彙的複合動詞形成のメカニズムは、それ自体では、他動性調和の現象を予測しない。他動性調和と矛盾する「*浮かび見る」(*ukabi-mi*) も (45) のように形成することができる。

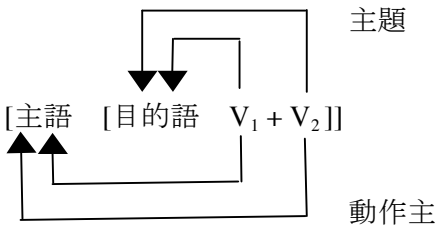
(45)



従って、他動性調和の現象を、語彙的複合動詞形成のメカニズムの帰結として導くことはできない。

(43) において、主語が「押し」と「倒す」の動作主として解釈され、目的語が双方の動詞の主題として解釈されることは、(46) に示すように、それぞれの動詞が主語と目的語に主題役割を与えることを示唆する。

(46)



主題役割がこのように与えられるのであれば、例えば、目的語が V_1 の動作主、V_2 の主題とし

て解釈されるようなことはありえない。さらに、この分析を支持する証拠を、影山 (1993) の議論の中に見出すことができる。影山は、(47) と (48) のような対比に基づいて、V_1 と V_2 の双方が主語および目的語を意味的に選択することを示す。

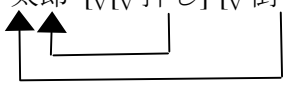
(47) a.　油が壁に染み付いた
　　 b.　蔦が棒に絡み付いた

(48) a. *蔦が棒に染み付いた
　　 b. *油が壁に絡み付いた

例えば、(47a) の文法性は、「油が壁に染みる」の適格さに対応し、(48a) の非文法性は、「蔦が棒に染みる」の不適格さに対応する。「染みる」(*simi*) は、液状の主語と個体状の目的語を選択するため、(47a) のみがこの選択制限を満たす。よって、この対比は、V_2 のみならず、V_1 も主語、目的語と選択関係にあり、主語、目的語を項とすることを裏付ける。

語彙的複合動詞 V_1+V_2 において、V_1 と V_2 の双方が、文内の他の構成素と選択関係にあるのであれば、*v* とも選択関係を有する。結果として、他動性調和現象は、*v* の選択制限の帰結として導かれる。(49a) は、(43) における V_1 と V_2 の目的語との選択関係、(49b) は、*v* の V_1 と V_2 との選択関係を示す。

(49) a.　[$_{VP}$ 太郎 [$_V$[$_V$ 押し]-[$_V$ 倒す]]]



　　 b.　[$_{v'}$ [$_{VP}$ 太郎 [$_V$[$_V$ 押し]-[$_V$ 倒す]]] *v**]

Chomsky (2000) 以降、*v* には二種あることが広く仮定されている。*v** は他動詞／非能格動詞を選択して、外項を指定部にとり、*v* は非対格動詞を選択する。(49b) では、「押す」、「倒す」が共に他動詞であるため、*v** の選択制限が満たされている。より一般的には、*v** の場合、V_1 と V_2 が共に他動詞あるいは非能格動詞であれば、選択制限と齟齬はない。また、*v* の場合は、V_1 と V_2 が共に非対格動詞である時のみ、選択要件が満たされる。よって、以下に再掲する他動性調和現象が説明される。

(50)　語彙的複合動詞 V_1+V_2 において、V_1 と V_2 は外項の有無に齟齬があってはならない。

他動詞／非能格動詞と非対格動詞を含む語彙的複合動詞は排除される。*v** が VP と併合すれば、非対格動詞が *v** の選択要件を満たさず、*v* が採用されれば、他動詞／非能格動詞が *v* の選択制限に抵触する。

V_1 と V_2 の双方が、文内の他の構成素と選択関係にあるという日本語の語彙的複合動詞の性質を観察し、この性質から他動性調和現象が導かれることを見てきた。影山 (1993) が指摘するように、他動性調和が日本語の複合動詞に特有の現象であるのであれば、日本語の特徴は、上記の性質を有する複合動詞の生成が可能であり、これを多用する点に求められる。なぜ、日本語ではこのような複合動詞が許容されるのだろうか。すでに紹介したように、語彙的複合動詞においては、V_1 と V_2 がそれぞれ独自の VP を投射せず、V_1+V_2 が単一の VP を投射することが、影山 (1993) によって示されている。影山は、この考察に基づいて語彙的複合動詞は語彙部門で形成されるとするが、V_1 と V_2 がそれぞれ文内の他の要素と選択関係にあることは、語彙的複合動詞が統語的に、すなわち、(51a) に示すように併合により形成されることを示唆する。[10]

(51) a. $\gamma_1 = \{V_1, V_2\}$
b. $\gamma_2 = \{DP, \{V_1, V_2\}\}$

目的語は、(51b) に示すようにこの複合動詞に併合し、V_1 と V_2 の双方から主題役割を与えられる。(51a) が可能であるためには、形態的には γ_1 が語として解釈され、統語的には γ_1 のラベルが適切に決定されなければならない。従って、この二つの条件が満たされるが故に、日本語では、二つの動詞の直接的な併合による複合動詞形成が可能になると考えられる。では、この二つの条件はどのように満たされるのだろうか。以下に、V_1 の形態的性質と前節で提案した述語屈折の分析が、この問いに答えを与えることを示す。

まず、語彙的複合動詞の V_1 は、(52) に示すように、動詞語幹＋*i* という連用形で表れる。[11]

(52) a. 押し倒す = os-i + taos + ru
b. 滑り落ちる = suber-i + oti + ru

これは、明確に語彙部門で形成される、語彙概念構造の操作を伴う複合動詞の場合と同様である。

(53) 飛び込む = tob-i + kom

従って、形態部門が、語彙的複合動詞を語として解釈することに支障はない。

また、以下の例が示すように、動詞の連用接辞は、前節で提案した λ 素性の一種に他ならない。

(54) a. 花子は、いつも、[$_{vP}$ テーブルを押し]、花瓶を倒す
b. 太郎は、[$_{vP}$ 滑り]、穴に落ちた

(54) では、*v*P が λ 素性を有するため投射せず、λ 素性は連用 (preverbal) として与値される。実際、(55a) は、V_1 と V_2 の間にポーズを置いた場合には、(55b) の構造を与えられる。

(55) a. 花子が太郎を押し倒した
b. 花子が、[$_{vP}$ 太郎 $_i$ を押し]、*pro*$_i$ 倒した

従って、語彙的複合動詞は、正確には以下の構造をもつと考えられる。

(56) $\gamma = \{V_1 [\lambda], V_2\}$

V_1 が λ 素性を有するが故に、γ は V_2 のラベルを受け継ぎ、γ のラベリングに問題は生じない。λ 素性は、V_2 により連用 (preverbal) を与値され、*-i* として具現化する。

以上の分析が正しければ、他動性調和現象を示す日本語の語彙的複合動詞の存在は、間接的にではあるが、φ 素性一致の欠如と関連していることになる。日本語は φ 素性一致を欠き、φ 素性一致に代わってラベリングを可能にする素性 λ を有する。λ 素性は、DP、PP においては文法格、述語においては屈折として表れるが、動詞が λ 素性を有する場合には、二つの動詞を直接、統語的に併合することが可能になる。このように形成された複合動詞が、語彙的複合動詞である。

5. 日本語の主要部後置型語順に関する考察

日本語の項省略現象、多重文法格現象、スクランブリング、語彙的複合動詞について分析を行ってきたが、本論を締めくくる前に、φ 素性一致の欠如を基礎とする分析が、主要部後置型語順とどのように関連するかを考える。最初に Saito (2012) で提案した日本語句構造の形成メカニズムとそれに基づく主要部後置型語順の分析を紹介する。その上で、φ 素性一致の欠如がこのメカニズムを可能にすることを示す。

第２節では、格素性の値を必要とする DP や PP が領域内を探索して、格を与値されるとする Bošković (2007) の提案を採用し、日本語文法格の分析を行った。この分析は、主格主語のみならず主格目的語も、主格を与値する T を領域内に含むことを含意する。この点において、主格目的語が、(57b) に示すように、T の投射内に移動するとする Koizumi (1998) の提案と合致するものである。

(57) a. 花子がテルグ語がわかる (こと)

b.　[$_{TP}$ 花子が [$_{T'}$ テルグ語が [$_{T'}$ [$_{vP}$ *t* [$_{v'}$ [$_{VP}$ *t* わかる (wakar)] *v*]] T (-ru)]]]

しかし、Yatsushiro (1999) は、主格目的語は (57b) にようには移動せず、目的語の位置に留まることを示す。ここでは、遊離数量詞の分布を考察することにより、この事実を確認する。

まず、Miyagawa (1989) による以下の対比を見よう。

(58) a.　学生が３人この鍵でドアを開けた
　　b. ??学生がこの鍵で３人ドアを開けた

(58a-b) は、遊離数量詞が、隣接する名詞句を修飾することを示す。[12] (58b) では、「３人」と「学生」が隣接していないため、意図された修飾関係が成立しない。この観察をふまえて、Miyagawa (1989) は、(59) の文法性が非対格仮説の証拠となることを指摘する。

(59)　ドアがこの鍵で３つ開いた

非対格仮説によれば、(59) の「開く」が非対格動詞であることから、「ドア」は、(60) に示すように、目的語の位置で主題の役割を得た後に、主語の位置に移動する。

(60)　[$_{TP}$ ドアが [$_{vP}$ [$_{VP}$ この鍵で [$_{VP}$ *t* ３つ 開い (ak)]] *v*] T (ta)]

従って、「ドア」が移動する前に、遊離数量詞「３つ」が「ドア」を修飾する関係が成立すると考えることができる。

Miyagawa (1989) の考察をふまえて、次に、以下の対比を考える。

(61) a.　学生が３人テルグ語がわかる (こと)
　　b. ??学生がテルグ語が３人わかる (こと)

(61b) は、「学生」と「３人」が隣接条件を満たさず、不適格であるが、(57b) に示した主格目的語の移動分析の下では、誤った予測がなされる。この例は、以下のように派生されるからである。

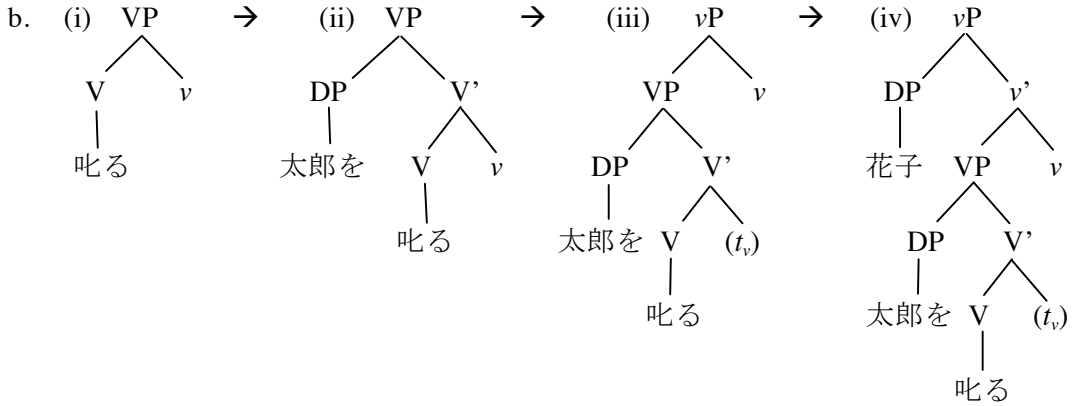
(62)　[$_{TP}$ 学生が [$_{T'}$ テルグ語が [$_{T'}$ [$_{vP}$ *t*　３人 [$_{v'}$ [$_{VP}$ *t* わかる (wakar)] *v*]] T (-ru)]]]

よって、主格目的語は、T を領域内に含む位置に移動せず、目的語の位置に留まるとの結論を得る。

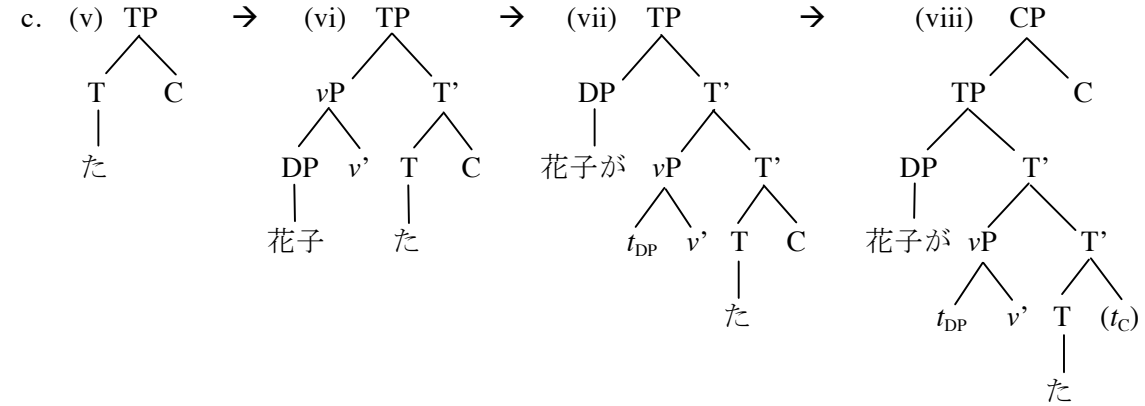
では、主格目的語は、どのように主格を与値されるのだろうか。Saito (2012) では、Kitagawa (1986)、Shimada (2007)、外池 (2009) 等が提案する主要部移動による句構造生成のメカニズムを採用することにより、この問いに答えようとする。フェイズ理論に基づく外池 (2009) の提案を (63a) に適用した派生を (63b-c) に示す。[13]

(63) a.　花子が太郎を叱った

b.



c.



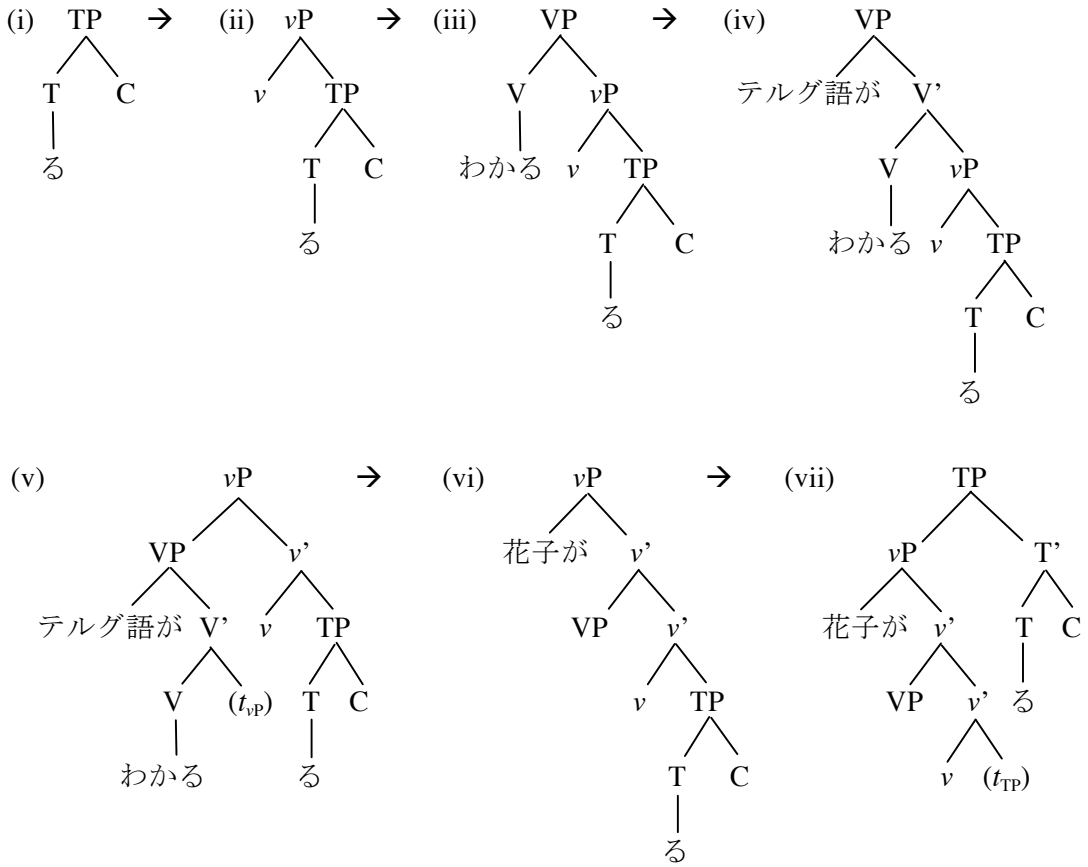
(63b) に示す *v*P フェイズの派生は、フェイズ主要部の *v* から始まる。*v* は V を選択することから、まず、(i) のように V と併合する。次に、{V, *v*} は、V の選択要件を満たすために、目的語の「太郎」と併合する。対格は、{V, *v*} が与値することが仮定されており、本論第３節で提示した文法格与値の分析に従えば、この時点で「太郎」に対格が与えられる。(iii) では、*v* が VP を補部とするために移動し、VP と内的に併合する。最後に外項の「花子」が *v*P

と併合し、*v*P フェイズが完成する。(63c) は、CP フェイズの派生を示す。フェイズ主要部の C が T と併合し、(v) を得る。(vi) では、(63b) で生成した *v*P が併合し、T の選択要件を満たす。次に、「花子」が移動 (内的に併合) し、{T, C} により主格を与値される。最後に、C が TP を補部とするために、TP と内的に併合して、(viii) の句構造が派生される。[14]

Saito (2012) は、(63) に例示した句構造派生のメカニズムの帰結を二つ指摘する。第一に、主格目的語の問題の解決が可能になることがある。すでに見たように、主格目的語は、目的語の位置に留まり、かつ、主格を与値される。Takahashi (2010) は *v* が対格の与値に関わる場合にのみ、フェイズ主要部となることを提案しているが、この仮定に従えば、(64a) に再掲する (57a) は、(64b) に示すように派生される。

(64) a.　花子がテルグ語がわかる (こと)

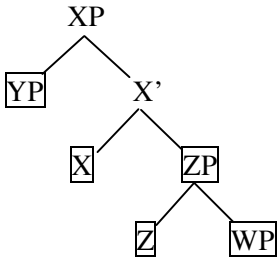
b.



この例では、対格を与値される項がないため、C が唯一のフェイズ主要部となる。(i)-(iii) では、選択要件に従って、T-C、*v*-T-C、V-*v*-T-C の構成素が順次形成される。(iv) で目的語が併合し、この時点で {T, C} により主格を与値される。このように、主格目的語は、移動することなく、目的語の位置で主格を与えられる。次に、(v) に示すように、*v*-T-C が内的に併合し、*v*P を形成する。(vi) では、主語が併合し、主格を与値される。(vii) で、T-C が内的に併合して、T が *v*P を補部とする構造ができる。最後に、C の内的併合をもって派生が完成する。

外池 (2009) の派生メカニズムを仮定することにより得られるもう一つの帰結は、Kayne (1994) の線状的先行関係の構造対応公理 (Linear Correspondence Axiom, LCA) により、日本語の主要部後置型語順を導く可能性が開かれることである。句構造は併合によって形成されるが、併合は階層関係のみを創出し、線上的先行関係を指定しない。よって、構成素の線上的先行関係を決定する理論が必要となる。Kayne (1994) の LCA は、線上的先行関係が、構造上の非対称的 c 統御関係に対応するとするものであり、この役割を果たす。(65) の構造を用いて、Chomsky (1994) が修正を加えた LCA を簡単に見ておこう。

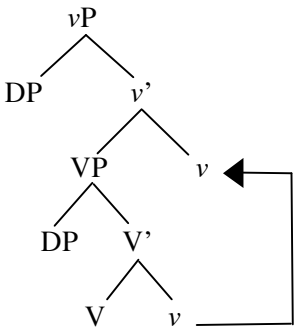
(65)



XP 内の要素の線上的先行関係を決定するのは、主要部と最大投射の非対称的 c 統御関係である。指定部にある YP は、主要部 X と補部 ZP を非対称的に c 統御する。よって、指定部は、主要部と補部に先行する。また、主要部 X は、補部内のすべての要素、すなわち主要部 Z と補部 WP を非対称的に c 統御し、その結果として、主要部は補部に先行する。このようにして、指定部 – 主要部 – 補部の語順が導かれる。

LCA は極めて有力な仮説であるが、主要部 – 補部の語順を予測するため、主要部後置型言語については、より詳細な分析が必要となる。Kayne 自身が提示する分析は、補部が主要部を非対称的に c 統御する位置に移動するとするものであるが、CP を含めすべての句が主要部後置型である日本語のような言語にこの分析が適用しうるかは定かではない。これに対して、外池 (2009) の派生メカニズムは新たな可能性を示唆する。*v*P フェイズを例にとって、LCA の適用を考えてみよう。

(66)

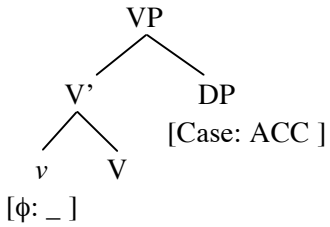


v は、まず V と併合し、VP と内的に併合することにより、*v*P を投射する。移動には、顕在的移動と非顕在的移動があるが、(66) における *v* の移動が非顕在的であると仮定しよう。非

顕在的移動では、音声素性が始点で解釈される。また、LCA は、表層的な語順に係る公理であり、音声素性に位置に基づいて、線上的先行関係を決定するものと考えられる。よって、LCA が (66) の構造から、線上的先行関係を導く際には、*v* を着点ではなく、始点にあるものとすることになる。この結論に従えば、主語 DP は目的語 DP と動詞 V を非対称的に c 統御し、目的語 DP は V を非対称的に c 統御することから、主語 (指定部) – 目的語 (補部) – 動詞 (主要部) の語順を得る。V と *v* の先行関係は指定されないが、この問題は、*v* が V に付く接辞であるとすることにより解決しうる。

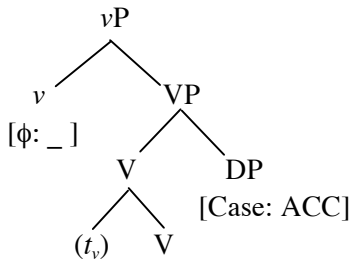
Saito (2012) では、外池 (2009) が提案する句構造形成のメカニズムを普遍的なものとして、主要部前置型／後置型の語順の相違を、主要部の内的併合が顕在的であるか非顕在的であるかの相違に基づいて分析することを示唆した。一方、Kitahara (2013) は、日本語については外池 (2009) の派生、英語については、*v* が {V, DP} と併合する標準的な派生が適用されるとしている。本論の第２節で提示した φ 素性と格素性与値のメカニズムにより、Kitahara の提案を支持する証拠を得ることができる。一例として、英語の *v*P について考えてみよう。主要部の内部併合を伴う派生を (67) に示す。

(67) a.



→

b.



(67a) において、目的語が {*v*, V} と併合し、対格を与値される。φ 素性を伴う *v* は、目的語が領域内にないため、この時点では、φ 素性が与値されない。(67b) に示すように、*v* は VP と内的に併合することによって、はじめて目的語を領域内に探索しうる。しかし、目的語の DP はすでに格を与値されているため、活性条件により、*v* と目的語の間に一致の関係は成立しない。*v* の φ 素性は与値されず、結果として派生が破綻する。第２節において英語では項省略が許容されないことを説明する際に、φ 素性の与値に係る活性条件が不可欠な役割を果たしたが、この分析を維持する限り、英語には、(67) ではなく、*v* が {V, DP} と併合する標準的な派生が適用されるとの結論を得る。

以上の議論は、主要部の内部併合を伴う派生は、英語のみならず、より一般的に φ 素性一致言語に適用されないことを含意する。日本語においてこの派生が可能であるのは、φ 素性一致を欠くからに他ならない。[15] 日本語では、φ 素性一致の欠如が主要部の内的併合を伴う派生を可能とし、また、主要部の内的併合が非顕在的であるが故に、主要部後置型の語順となるということができる。主要部後置型の語順は、Kayne (1994) が指摘するように、主要部を非対称的に c 統御する位置への補部の移動によっても得られる。従って、すべての主要部

後置型言語が、外池 (2009) が提案する派生のメカニズムを採用するわけではない。しかし、日本語においては、φ 素性の欠如と主要部後置型の語順が密接に関連していると思われる。

6. 結論

本論では、日本語の基本的性質として、φ 素性一致の欠如を仮定し、その帰結を追究した。第２節では、まず、項省略現象が、φ 素性一致の欠如の直接的な帰結として導かれるとする Saito (2007) の議論を概観した。その上で、φ 素性一致の欠如と矛盾しない文法格与値メカニズムを提供するものとして、Bošković (2007) の提案を採用し、日本語文法格の分析を提示した。この分析の顕著な帰結としては、主格、属格に見られる多重文法格現象の説明がある。第３節では、日本語文法格の機能が、ラベリングを可能にすることにあることを提案した。また、文法格と述語の屈折を類似するものとして分析する Sells (1995)、An (2009) を発展させて、両者を、ラベリングを補助する同一の素性の具現化であるとする分析を提示した。この分析により、日本語において、非演算子移動、非 NP 移動であるスクランブリングが許容されることに説明を与えた。さらに、第４節では、影山 (1993) において詳細に検討されている語彙的複合動詞の特異な性質も、この分析の帰結として導かれることを示した。第５節では、主格目的語の文法格与値をとりあげて、併合による句構造形成のあり方を検討し、日本語の主要部後置型語順が、φ 素性一致の欠如と密接に関連していることを示唆した。

本論の冒頭で紹介したように、1980 年代以降、日本語文法の特徴を説明するパラメターが様々な形で追究されてきた。本論は、φ 素性一致の欠如とその結果必要となるラベリング補助素性 λ によって、日本語の文法的特徴に説明を与えることを提案し、このプロジェクトを発展させることを試みたものである。この試論を検証し、さらに発展させていくためには、項省略、文法格、スクランブリンブ、複合動詞、線状化のそれぞれの現象について、比較統語論の観点から分析を深めていく必要がある。

Notes

* 本論は、2012 年 9 月にフンボルト大学で開催された *Formal Approaches to Japanese Linguistics* 6 における口頭発表を基礎としており、現在のバージョンは、コネティカット大学統語論セミナー (2013 年 3 月) 及び国立国語研究所共同研究プロジェクト第 6 回研究会 (2013 年 5 月、南山大学) で発表したものである。３回の発表の場で、多くの方々から有益なコメントをいただいた。特に、Jonathan Bobaljik、Željko Bošković、藤井友比呂、岩谷悠馬、岸本秀樹、Luigi Rizzi、杉崎鉱司、Hubert Truckenbrodt、八代和子の各氏に、この場を借りてお礼を申し上げる。

1. Chomsky (2008) では、φ 素性は元来フェイズ主要部の C と *v* に属し、T と V によって受け継がれるものとされており、本節の後半部で紹介する Bošković (2007) でもこの分析が採用されている。

この分析に従えば、正確には、*v* ではなく V が目的語の DP と一致することになるが、ここでは、いずれの分析を採用しても議論に影響がないため、T と *v* が φ 素性を有するというより単純な分析を仮定する。

2. (9b) において DP の格を ACC としているが、これは、DP が先行する文脈において目的語であったことを想定したものであり、もし主語であれば、NOM となる。格の具体的な値は、議論に影響を与えるものではない。

3. Bošković (2007) は、(13c) における DP と T の関係を一致の一種とみなし、この関係が活性条件を満たさないため、活性条件そのものの除去を提案している。一方で、活性条件が項省略の説明において重要な役割を担うことはすでに見た通りである。本論では、活性条件を φ 素性一致に係る条件として維持する。

4. この問題は、機能範疇主要部が複数の DP と一致することを許容する Hiraiwa (2001) の多重一致仮説により回避することができるが、日本語の多重格に関する限り、Bošković (2007) の分析がより直接的な説明を可能にすることは明らかであろう。(15) に示した多重主語文の分析は一般性を有し、例えば、英語においても多重主語文が可能であることを予測する。このことは一見問題となるように思われるが、次節で、英語においては多重主語文が他の要因により排除されることを示す。

5. 日本語の名詞句構造については、Saito, Lin and Murasugi (2008) を参照されたい。

6. スクランブリングの非演算子移動、非 A 移動としての特徴付けは、Webelhuth (1989) による。(22) のような例を詳細に検討した Saito (1989) では、日本語スクランブリングを、演算子―変項の関係を形成しない A’ 移動としている。

7. 本文では、λ 素性を句に付与されうるものとしているが、Chomsky (2000) の包括条件 (inclusiveness condition) を考慮して、λ を独立した機能範疇とすることが北原久嗣氏および Željko Bošković 氏により示唆された。この可能性は追究すべきものと思われるが、λ が意味を欠く純粋な形式的な素性であることから、ここでは、主要部とはみなさないことにする。

8. 第５節では、Chomsky (2008) の提案に基づき、主格、属格、対格がそれぞれ T-C、N-D、V-*v* に与値されるものとして、分析に修正を加える。

9. 例えば、使役の接尾辞「させ」が統語的には独立した動詞として振る舞うことは、Kuroda (1965b) 以降、広く仮定されている。使役文が補文構造を伴うことについて、最もよく知られている証拠としては、主語指向性を示す「自分」の解釈がある。使役文内の「自分」は、使役者と被使役者のいずれも先行詞とすることができる。この事実は、被使役者が補文の主語であることを示す。

10. 二動詞の直接的な併合による語彙的複合動詞の派生は、エド語結果連鎖動詞、中国語複合動詞との比較に基づき、Saito (2001) ですでに提案したものである。

11. 動詞の語幹が母音で終わる場合には、以下のように、*-i* が削除される。

(i) 群れ飛ぶ = mure-~~i~~ + tob

12. Miyagawa (1989) は、より正確には、遊離数量詞と名詞句が姉妹関係になければならないとしている。

13. 外池 (2009) は英語の分析を提示しており、また、異なる仮定を採用しているため、(63) に示す派

生は細部においては外池の提案を忠実に反映したものではない。しかし、派生の基本的なメカニズムについては、外池の提案をほぼそのまま適用している。

14. (63b-c) で形成される構造には、第３節で提示したラベリングのメカニズムが適用されるものと仮定するが、唯一問題となりうるのは、(viii) における上位 T' = {*v*P, TP (下位 T')} のラベリングである。解決策としては、(i) 主要部の内部併合の痕跡 (コピー) は、統語的・意味的役割が全くないため、完全に削除される、(ii) T／TP と併合する *v*P も λ 素性を有し、T により音声的には空の値を与えられる、という二つの可能性が考えられる。

15. 日本語が、特に、主要部の内的併合を伴う派生を採用する理由としては、Pesetsky (1989) が提案する earliness principle が考えられる。素性の与値ができるだけ早期になされなければならないとすると、格素性の与値のみを必要とする言語では、目的語が併合されると同時に対格が与値される派生が選ばれることになる。φ 素性と格素性の双方が与値されなければならない場合には、両方を同時に満たすことができず、*v* と目的語のいずれかが移動しなければならない。主要部の内的併合を伴う派生では当該の移動が (67b) に示した主要部の内的併合となり、標準的な派生では目的語の NP 移動となる。従って、二つの派生は、earliness によっては区別されない。

References

An, Duk-Ho (2009) "A Note on Genitive Drop in Korean." *Nanzan Linguistics* 5: 1-16.

Bobaljik, Jonathan (1995) *Morphosyntax: The Syntax of Verbal Inflection*. Ph.D. dissertation, MIT.

Bošković, Željko (2007) "On the Locality and Motivation of Move and Agree: An Even More Minimalist Theory." *Linguistic Inquiry* 38: 589-644.

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris Publications.

Chomsky, Noam (1994) "Bare Phrase Structure." In Gert Webelhuth (ed.), *Government and Binding Theory and the Minimalist Program*, 383-439. Oxford: Blackwell.

Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework." In Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.), Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam (2008) "On Phases." In Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta (eds.), *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essay in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, 133-166. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection." *Lingua* 130: 33-49.

Fukui, Naoki (1986) *A Theory of Category Projection and its Applications*, Ph.D. dissertation, MIT.

Hale, Ken (1980) "Remarks on Japanese Phrase Structure: Comments on the Papers on Japanese Syntax." *MIT Working Papers in Linguistics* 2: 185-203.

Hiraiwa, Ken (2001) "Multiple Agree and the Defect Intervention Constraint." *MIT Working Papers in Linguistics* 40: 67-80.

Huang, C.-T. James (1992) "Complex Predicates in Control." In Richard K. Larson, et al. (eds.), *Control and*

Grammar, 109-147. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

影山太郎 (1993)『文法と語形成』東京：ひつじ書房.

Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Kim, Soowon (1999) "Sloppy/Strict Identity, Empty Objects, and NP Ellipsis." *Journal of East Asian Linguistics* 8: 255-284.

Kitagawa, Yoshihisa (1986) *Subjects in Japanese and English*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Kitahara, Hisatsugu (2013) "Simplest Merge and Language Variation." Unpublished manuscript, Keio University.

Koizumi, Masatoshi (1998) "Remarks on Nominative Objects." *Journal of Japanese Linguistics* 16: 39-66.

Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Kuroda S.-Y. (1965a) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. Ph.D. dissertation, MIT.

Kuroda, S.-Y. (1965b) "Causative Forms in Japanese." *Foundations of Language* 1: 30-50.

Kuroda, S.-Y. (1988) "Whether We Agree or Not." *Linguisticae Investigationes* 12: 1-47.

Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and Case Marking in Japanese*. San Diego: Academic Press.

Murasugi, Keiko and Tomoko Hashimoto (2004) "Three Pieces of Acquisition Evidence for the *v*-VP Frame." *Nanzan Linguistics* 1: 1-19.

Oku, Satoshi (1988) *A Theory of Selection and Reconstruction in the Minimalist Program*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.

Otani, Kazuyo and John Whitman (1991) "V-raising and VP-ellipsis." *Linguistic Inquiry* 22: 345-358.

Pesetsky, David (1989) "Language-Particular Processes and the Earliness Principle," Unpublished manuscript, MIT.

Saito, Mamoru (1982) "Case Marking in Japanese: A Preliminary Study." Unpublished manuscript, MIT.

Saito, Mamoru (1989) "Scrambling as Semantically Vacuous A'-movement." In Mark R. Baltin and Anthony S. Kroch (eds.), *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, 182-200. Chicago: University of Chicago Press.

Saito, Mamoru (2001) "Movement and θ-roles: A Case Study with Resultatives." In Yukio Otsu (ed.), *The Proceedings of the Second Tokyo Conference on Psycholinguistics*, 35-60. Tokyo: Hituzi Syobo.

Saito, Mamoru (2007) "Notes on East Asian Argument Ellipsis." *Language Research* 43: 203-227.

Saito, Mamoru (2012) "Case Checking/Valuation in Japanese: Move, Agree or Merge?" *Nanzan Linguistics* 8: 109-127.

Saito, Mamoru, T.-H. Jonah Lin and Keiko Murasugi (2008) "N'-Ellipsis and the Structure of Noun Phrases in Chinese and Japanese." *Journal of East Asian Linguistics* 17: 247-271.

Sells, Peter (1995) "Korean and Japanese Morphology from a Lexical Perspective." *Linguistic Inquiry* 26: 277-325.

Şener, Serkan and Daiko Takahashi (2010) "Argument Ellipsis in Japanese and Turkish." *MIT Working Papers in Linguistics* 61: 325-339.

Shimada, Junri (2007) "Head Movement, Binding Theory, and Phrase Structure." Unpublished manuscript, MIT.

篠原道枝 (2006)『日本語の項削除文の LF コピー分析 ― 痕跡の要素を含む観点から』修士論文, 南山

大学大学院人間文化研究科言語科学専攻.

Takahashi, Masahiko (2010) “Case, Phases, and Nominative/Accusative Conversion in Japanese.” *Journal of East Asian Linguistics* 19: 319-355.

外池滋生 (2009)「ミニマリスト・プログラム」, 中島平三 (編)『言語学の領域（I)』東京：朝倉書店, 135-168.

Ura, Hiroyuki (1999) “Checking Theory and Dative Subject Constructions in Japanese and Korean.” *Journal of East Asian Linguistics* 8: 223-254.

Webelhuth, Gert (1989) *Syntactic Saturation Phenomena and the Modern Germanic Languages*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Williams, Edwin (1977) “Discourse and logical form.” *Linguistic Inquiry* 8: 101-139.

Yang, Dong-Whee (1983) “The Extended Binding Theory of Anaphors.” *Language Research* 19: 169-192.

Yatsushiro, Kazuko (1999) *Case Licensing and VP Structure*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.